

庄内の稲作生産体制の変化について

—1960年代～1980年代を中心に—

□推 薦

指導教員 三原 容子

公益大恒例の卒業論文集推薦も4回目だ。各ゼミから1本推薦することができるのだが、掲載できる論文がないと判断する場合や、作成した本人に論文集制限枚数まで圧縮する時間がない等の場合には、推薦しなくてもよい、というのがルールである。私の場合、ゼミ生が1名だった年も含めて、必ず推薦してきた。その理由を三点挙げたい。

第一に、晴れの機会を利用しなければもったいないということである。大部分の卒業生はこれから先二度と論文を書くことはないだろう。もし書く機会があるとしても、卒業論文集掲載はレコード大賞の新人賞のようなもので、一生に一度しかチャンスがない。費用負担なしに得られる機会を逃す手はない。

第二に、良いものを書けば選ばれるという目標をゼミ生に持ってほしいからである。ゼミ生の論文はホームページで公開している。つたなくても、公開可能レベルまでは到達するというハードルを越えなければならない。それに加えて、選ばれるということが刺激になればよいと考えている。執筆の際には全員に、論文集掲載可能な程度の枚数で収めるよう指導している。

第三に、これがもっとも重要なのだが、私自身にプレッシャーをかけるためである。全員の卒論を公開レベルまで、さらに一名は卒業論文集に掲載できるレベルまで、「何がなんでも指導するぞ」という意地のようなものである。学生の論文というのは教員との共同作業である。教員がやや高めのレベルを要求し、両者が時間と手間をかければ、その分だけ良いものになっていく。教員の側で時間と手間を惜しまない！と決めたのだ。

さてそこで、仙道論文である。専門外の領域ゆえ、確かな指導をできたかどうか、自信はない。門外漢の私がゼミでやってきたことは、(1) やってみたいと思えるテーマに出会うため、あの手この手で刺激を与え、相談に乗ること。(2) 良きテーマ案内人となれと説くこと。人を未知の世界に案内するには、看板

のつけ方、案内の順序、説明資料、用語の選択など、正確さや親切さが要求される。(3)論述に関する指摘、つまり時間軸、空間軸、論理的整合性などの混乱を指摘して考え直させること。(4)資料を探せ、使った資料を活用せよ、引用の作法を守れ、などのアドバイスをすること。以上に尽きる。

仙道論文に限って言えば、(1)については、私の出番はほとんどなかった。3年生の時の沖縄ゼミツアーで、先輩の土田隆平さん(当時大学院生)から勧められ、自動車大好き人間の仙道さんがやる気になったのだと聞いている。

この論文を推薦した理由は二つある。一つは彼のねばり強さである。このテーマは、難しい用語や込み入った事情が満載である。しかし、私のような専門外の人間にわかるように説明せよと言ってきた。仙道さんは、本を読み直したり、頭をひねったりしながら、その難題によく応じた。農家出身ではあるが、あまり農業の手伝いをしてこなかった彼にとって、相当きつい作業だったろう。

二つ目は一次資料(歴史学上オリジナルな資料)を利用していることである。庄内地方の農業史に欠かせないと思われる月刊誌『農村通信』(私自身は未見である)を光丘文庫で閲覧し、『山形県統計書』で農業機械に関する数字を抽出してきた。一次資料を用いることによって、農業機械と生産方式との関連についての先行研究に、卒業論文レベルとしては十分な上積みが出来たと考える。

しかし「もう少し……」と思わないでもない。高望みと言われればそれまでだが、時間と手間がもっとかけられたら、資料のさらなる調査、論理のさらなる検討もできただろう。11月、12月中に通一通り書いていけばよかったのだが、そうはいかなかった。テーマだけは早くに決まっていたものの、12月から1月にかけて、猛烈な追い込みで作成したというのが真相である。そのために筋を痛めて通院するというおまけまでついてしまった。

我がゼミの4年生は毎年毎年、卒論作成期間の最短記録樹立を目指すレースをしているのだろうか。4年生初めにテーマと方法を確立する作業を終えて、就活をしながらこつこつと積み上げていけるように、これからは早め早めの指導をしたいと考えている。

就活と卒論に真剣に取り組むことが学生の顔つきを変えるのを私は見てきた。こうした経験が、社会に出てから、何らかの形で効いてくることを信じている。指導力が少しずつでも向上するよう努めていきたい。